事実を歴史的・具体的環境の中で見る

民族運動の歴史的環境

事実は曲げることのできないものである、とイギリスの諺は言っている。ある著作家が、さまざまな意義と相互関係での「民族原理」の偉大さを鶯のように調子よくうたっているのに、この「原理」の適用が大部分、葬式の行列を見て「いくらはこんでも、はこびぎれないように！」とさけんだあの有名な民話の主人公の言葉がうまく適切であったのとまさに同じ程度に、うまいのを見ると、とりわけこの諺が思い出される。

正確な事実、争う余地のない事実――これこそ、この種の著作家にとってはとくに堪えがたいものである。だが、これこそ、しばしば故意に紛糾させられている複雑困難な問題をまじめに究明しようとおもうかぎり、とくに必要である。だが、事実をどうやってあつめるか？　それらの結びつきと相互依存関係とを、どうやって明らかにするのか？

社会諸現象の分野では、**個々の**小さな事実をぬきだし、個々の例をもてあそぶという方法がもっともひろく行きわたっているが、これほど根拠の薄弱な方法はない。およそ個々の例をひろいだすことは、なんの苦労もいらないかわりに、なんの意義ももたないか、まったく否定的な意義しかもたない。というのは、万事は、個々の出来事の歴史的、具体的環境にあるからである。事実というものは、もしそれらを、それらの**全体**、それらの**関連**のなかで取りあげるならば、たんに「曲げることのできない」ものというだけではなく、また無条件に証拠となる物となる。小事実は、もしそれらを全体のそとで、関連のそとで取りあげるならば、もしそれらが断片的な、恣意的なものであるならば、まさにたんなる玩具か、あるいは、もっと悪いものである。たとえば、かつてまじめであったし、いまもそのように見られたがっているある著作家が、蒙古の羈絆(きはん)という事実を取り、これを二十世紀のヨーロッパのいくつかの事件を説明する一例として持ちだすとき、これをたんなる戯れとみなすことができるだろうか、あるいはこれを政治的詐欺行為とみなすほうが正しくはないだろうか？　蒙古の羈絆は、疑いもなく民族問題と結びついた歴史的事実である。二十世紀のヨーロッパにも、おなじように疑いもなくこの問題と結びついた一連の事実が見られる。だが、まじめくさって、二十世紀のヨーロッパの出来事を例解するために、蒙古の羈絆という「事実」をもちだすような人間はあまりいない。フランスではこういう型の人間を「民族的道化役者」と呼んでいる。

ここからでてくる結論は明らかである。すなわち、争う余地のない、正確な事実からよりどころになる土台をきずくよう試みなければならない、ということである。それは、こんにち一部の国々で法外に乱用されている「一般」論あるいは「実例」論のどれとでも対決できるような土台でなければならない。それが真に土台であるためには、個々の事実を取るのではなく、**ただ一つの**例外も**なしに**、その問題に関係のある事実の**総体**を取らなければならない。というのは、そうでないかぎり、いろいろな事実を勝手にえらびだし、拾いあげているのではあるまいかとか、歴史的現象全体の客観的な関連と相互依存関係のかわりに、もしかすると忌まわしい事がらを正当化するために、「主観的な」手加減がくわえられているのではあるまいかというような疑惑、まったくもっともな疑惑が生ずるのは避けがたいからである。

※　蒙古の羈絆……十三世紀のなかごろ、ロシアは東方の蒙古・タタール族の侵略を受け、それから約二世紀半にわたってその支配下にあった。この支配下ではテロル、経済的荒廃、貢納の懲取、文化財の破壊によって、国の経済的・文化的発展がおくらされた。　　第 23 巻 P300~302 「統計と社会学」1917 年 1 月に「序言」を執筆